

危険予知トレーニングの検証

岩手医科大学附属病院 循環器医療センター 中央放射線部 ○工藤 大和 (Kudo Yamato)
渡辺 隼杜 佐々木 忠司 村上 龍也

【背景・目的】

医療現場においてインシデント・アクシデントの発生は生命を脅かす危険がある。近年では医療事故により訴訟に至るケースも増えてきている。これは業務を行う上での危険予知能力が低いために発生していると考えられる。今回、危険予知トレーニングを実施することで、日常業務に潜んでいる危険に対する集中力・感受性を高め、さらにインシデント・アクシデントの発生低減に有効かを検証することを目的とした。

【対象・方法】

今年度当院に入職した新人診療放射線技師10名および、当院での業務経験(5年～28年)のある技師7名を対象に、CT撮影時(Fig.1)、ポータブル撮影時(Fig.2)の画像を提示し、危険が考えられる点、気を付けなければならない点を書き出してもらった。なお制限時間は5分間とした。



Fig.1 CT撮影時



Fig.2 ポータブル撮影時

【結果】

CT撮影時(Fig.3)、ポータブル撮影時(Fig.4)ともに新人、経験者ともに同じような項目を挙げていたが、経験者では、外傷患者や術後患者の場合を考慮し、創部への配慮という項目や、感染予防対策など新人より多くの項目を挙げていた。また、項目ごとの回答率ではルート類に関しては、新人では10/10人、経験者では7/7人で100%の回答率だったため、全員が注意を払っていた。それ以外の項目でも基本的には経験者のほうが高い回答率であった。

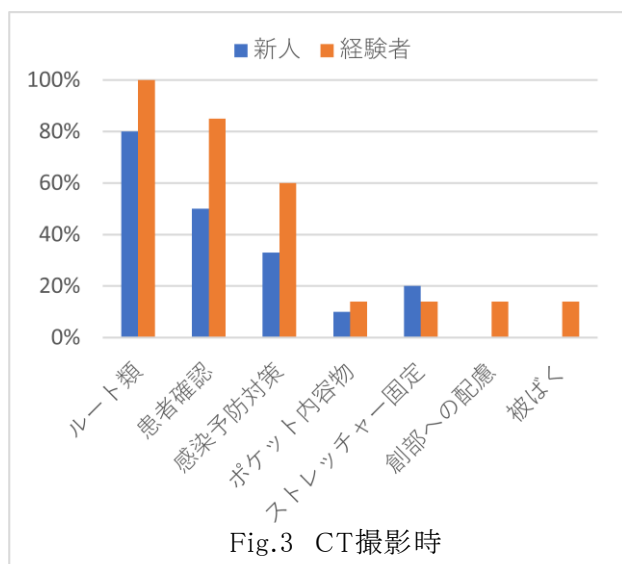


Fig.3 CT撮影時

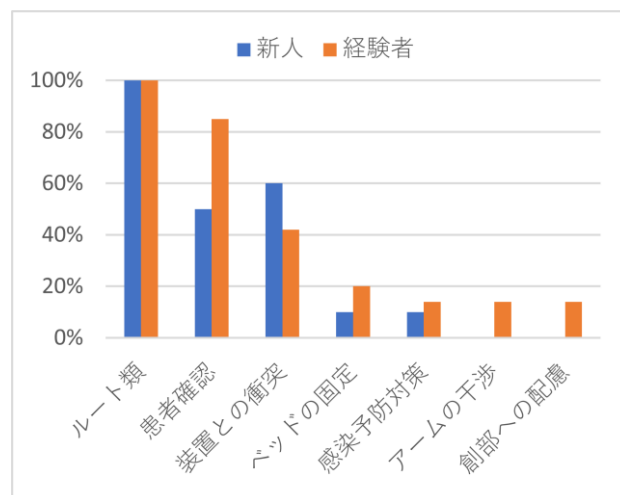


Fig.4 ポータブル撮影時

【考察】

基本的には、新人よりも経験者のほうが回答数、回答率ともに高く、知識や経験の差が出ていると考えられる。しかし項目によっては経験者よりも新人のほうが回答率の高い項目もあったため、経験者でも注意が足りていない可能性が考えられる。

【まとめ】

本来、危険予知トレーニングでは複数人でのディスカッションを行い、現状把握、本質追及、対策樹立、目標設定と順番に行うが、今回は個々の危険予知能力把握のためディスカッションを行わず、現状把握だけを行った。今回の結果から、複数人でディスカッションを行い、経験・知識を共有することで、新人だけでなく、全員の危険に対する集中力、感受性を向上する事が出来ると考えられる。

危険予知トレーニングの実施は新人教育だけでなく、職員全員の危険予知能力向上、危険の再認識のためにも有用だと考えられる。